

『花様年華・少女に飼われるペットな私』

特典シナリオ台本

【登場人物】

やなぎ ゆきね
柳雪音（14）

『私』の飼い主。

豪邸にひとりで暮らしている謎の少女。

年齢の割に落ち着いた話し方をする。

出会った時は大人びている一面をみせるが、

主従関係を結んだ後は、年相応な姿も見せる。

自身の特殊な境遇もあり周りに心を開くことができず、

ペットの犬（ワンちゃん）だけを愛していた。

私と出会うことで、少しずつ心をほどいていく。

（雪音は父親の愛人の子供であり、今の家は父親が用意したもの）

年齢…14歳 身長…153センチ

バスト…C 血液型…AB型

私（あめ）（??）

雪音に拾われた記憶喪失の女。

「あめ」という名前を雪音にもらい、

彼女のペットとして暮らしていくことになる。

過去のトラウマからか、声を失っている。

年齢…??歳（20〜22くらいの外見） 身長…160センチ

バスト…D 血液型…A型

【あらすじ】

雨の中。気がつくと『私』はひとり立ち尽くしていた。
どうしてここにいるのか。私は誰なのか。
何も思い出せず、動けず、声も出せない。

雨に濡れる私に傘を差し出す少女『雪音』
雪音は、優しく私を導き、自分の家に招き入れる。

どこへも行く当てがない私に対し、
寝る場所や食事などを提供する代わりに
雪音が持ちかけた提案は…。

「…私、ペットになってくれる？」

雪音に「あめ」と名付けられた私。
彼女のペットとして可愛がられる生活が始まるー。

【 Prologue : 邂逅 】

○公園・雨

雨の中。

気がつくと「私」はひとりポツンと立ち尽くしていた。

小さな足音が近づいてくる雪音。

傘もささずに濡れている私の様子を伺って、声をかける。

「(私の様子を伺う間・呼吸)」

「こんにちは。お姉さん。

どうしました？ こんなところで」

「傘もささないで」

「さむく、ないですか？

誰か待ってるなら、

屋根があるところがいいですよ」

「…あ、センチな気分に乗ってましたか？

だとしたら、ごめんなさい」

「(返事を待つ間) ……」

返事がないので、一方的に声をかけていく雪音。

「(ぼそっと) …何も話してくれないんですね」

雪音、私に傘を渡す。

「傘、持っててください」

雪音、学生鞆をあけてタオルを取り出す。

「何も言わないなら、勝手に拭きますね」

雪音、私の顔まわりをタオルで拭いていく。

「こんなに濡れて……」

ほら、じっとして」

タオルで拭いていく。

「お姉さん。おとななのに、なんだか、こどもみたい」

雪音、拭くのをやめて、左手にタオルを握らせる。

「このタオル、どうぞ。」

広げれば、胸元隠すくらいできると思います」

「…あ、傘もあげます」

「いいんです。家、すぐそこなので」

雪音、私から香る寂しい匂いを察知して尋ねる。

「大丈夫ですか…？ ひとりで」

雪音、しばらく返事の間を待ってから。

「お姉さん。美人だから、変な人に気をつけて。

それじゃ、さよなら」

雪音、私を置いて走っていく。
私、雨の中、一人で立ち尽くす。

離れたところから雪音、私に話しかける。

「ねえー！おねえさーんー！」

間。

「まだそこにいるんですかー！」

間。

「ずっと、そこにいるつもりですかー！」

雪音、ゆっくり足音が近づいてくる。

「…お姉さん。行くところ、ないんですね」

「どこにも、行くところがない」

「(返事を待つ間) ……」

「(相手の様子を伺って差し込むように)
どうしたらいいですか？私は」

「…何か、私にして欲しいことはありますか？」

「(雪音、気づいて)」

「……お姉さん。もしかして、声、出ないんですか？」

「そっか。喋れなかったんですね。
すみません。気づかなくて」

「……私の家、きますか？」

「うち、親いないので。遠慮せず」

間。

「……傘の中、入れてもらってもいいですか？」

雪音、あなたに近づいて。

「さあ、いきましよう」

雨の中、二人で歩いていく。

足がだんだんふわふわしてきて、

どこか夢の世界に誘われるように。

【EP01：雪音のお願い】

○雪音の家・居間

雪音の家に連れてこられた私。

雪音の家は豪華で大きなお屋敷だが、人の気配を感じない。

お風呂から上がると暖炉のあるソファーに座らされる私。

雪音がお茶を持ってくるのを待っている。

「雨、まだ降ってますね。

さっき天気予報見たら、夜遅くまで続くそうです」

お茶を机の上に置いて

「…どうですか？くつろげてますか？」

「お風呂の温度、大丈夫でした？

あったまりました？」

「私が頷いたのを見て)…ふふっ。

大丈夫です。あとで私も入りますから」

雪音、隣に座って

「(私がソワソワする様子を見て)

バスローブ、落ち着かないですか？

ちゃんとした服がなくて、ごめんなさい」

「…昔、母が着てたものはあるんですけど、

クローゼットの奥にしまったままで。

すぐには着れないんです」

「お姉さんの服、乾かしてるので。安心してください」

雪音、ポットからそれぞれカップに紅茶を注ぐ。

「紅茶、どうぞ」

私、注がれた紅茶飲む。

「美味しいですか？
ふふっ、お口にあってよかった」

「このお茶、香りがよくて落ち着くんです。でもちよっと温度の調節や蒸らす時間がずれると、本当の味わいは出せない」

「淹れ方は、教えて貰ったことはなくて。自分の感覚で決めてます」

「何度も煎れて、試して見極めて。その紅茶に合った最適な状態を見つける」

「一番美味しく飲まれるのが紅茶も幸せだと思ってます」

雪音も紅茶を飲んで

「……うん。いい味」

「あっ、自己紹介。まだでしたね」

「私、柳雪音といます。雪の音と書いて、ゆきねです」

「歳はいま、十四歳です。

ん？ 見えませんか？

ふふっ、落ち着いてるってよく言われます」

「父と母は、別で暮らしていて。

ここには私だけ。

お手伝いさんは時々様子を見にきてくれますけど」

「あ、ただ前は、ワンちゃんが一緒にいて……。

一年くらい前に虹の橋を渡って……」

「それから本当にひとりです。

お姉さんと同じ……」

雪音、私に近づいて

「……雨の中で、お姉さんを見たとき、思い出したの。

前に飼ってたワンちゃんのこと」

「……だからかな。なんか、放っておけなくなっちゃった」

雪音、私を抱き寄せて、ゆっくり頭を撫でる。

「……寂しかった？」

雪音、頭を撫でる。

「……大変だったね」

「(耳元で)……いいよ。

好きなだけ、ここにいても」

「行く場所がないなら、ここに」

「…いいよ？お姉さんが望むなら、いつまでも」

「この家では、お姉さんは何もしなくていい。食事も寝るところもぜんぶ与えてあげる」

「お姉さんが今、背負っているもの、纏っているもの、抱えているもの。ここでは必要ない。」

ぜんぶ私がお姉さんのお世話をしてあげる」

「ふふっ、これはね、私の望みでもある。」

私がしたいの。お姉さんのお世話」

「(何か繋がり呟くように) そう、ワンちゃん、ペット……。…うん、ペットみたいに」

「…お姉さんは、今日から私のペットになる。そして、ここで穏やかに暮らす」

「私がお姉さんの嫌がることはしない。すこしでも嫌だと思ったら離れて。」

…でも最大限、優しくする」

「…お姉さんが受け入れてくれるなら、うなずいて。私の話を聞いて」

「…ダメなら、このままうちを出て行ってもいいから」

間。

「……私の、ペットになってくれる？」

【EP01-S：約束と名前】

○雪音の家・居間

「…ありがとう。」

それじゃあ、ここが今日からお姉さんのおうちね」

雪音、私を撫でながら喋る。

「あ、お姉さんってずっと呼ぶのも変だね。
なまえ、……。ちょっと、待ってね」

雪音、しばらく考えている間。雨の音が聞こえる。

「……あめ」

「あめ、って、どう？」

雨が降る日に出会ったから、あめ」

「(自分でしっくりきて) うん、うん。響きもかわいい」

「雨粒の音が聞こえたら、
いつでもあなたのこと思い出せるし」

「あなたも、自分が何者なのか忘れない」

「……お姉さんの名前は、今日から『あめ』だよ」

「…練習しよっか。」

名前を呼ばれたら、頷いて。呼ばれたら、ね？」

「……あめ」

「あーめ」

「あめ」

「はい、よくできました。
ご褒美にプレゼントあげる」

雪音、立ち上がって、今の奥から首輪を持ってくる。

「はい、あめ。これ。わかる？ ……首輪」

「前のワンちゃんのために買ってて…。
汚くない、使ってなかった新品だよ」

雪音、私と向き合って、儀式のように語り始める。

「あめ。これはね、あなたが私のペットという証。
これをつけたら、あめとして、新しい人生がはじまる」

「私は飼い主として、あなたはペットとして。
お互いを敬い、愛し、
病める時も健やかなる時も、一緒にいること」

「……いい？ あめ。」

(うなずくりアクションをみて) ふふっ」

「首輪、つけてあげる」

雪音、私の首に首輪をつける。

「はい、ついた。……うん、似合ってる。かわいいよ」

「これからよろしくね。……あめ」

【EP02：生まれたての朝】

○あめの部屋・朝

あめの部屋。ベッドに眠っていると、
やさしくカーテンを開ける音が聞こえる。物音も。
日差しを浴びて、目の前には雪音がいる。

「…おはよう、あめ」

「気持ちよさそうに寝てたよ。
起こすの迷っちゃった」

「…おきよっか」

雪音、私の手を引いて上半身を起き上がらせて抱きしめる。

「ふふふっ、はい。おはよう」

雪音と私、ベットからでる。

「そしたらお着替えしましょうね。
あめのサイズに合うかわいい服、探してきたよ」

「お手伝いさん用の服だけど、きっと似合うと思う」

雪音、メイド服をとって近くの椅子にかける。

「じゃあお着替え。しよっか」

「パジャマ脱がすね。じっとしてて」

雪音、パジャマのシャツのボタンを外していく。

「(ボタンを外す時の呼吸) …よし、よし。とれた」

雪音、私の上を脱がす。

「ん？なに？」

脱がされるの、変な気持ち？」

「大丈夫だよ。慣れていくから」

雪音、上を脱がし切って、下のズボンに手を掛ける。

「はい。ズボン。片足ずつ抜いて……。」

右足、左足。うん、いいこ」

雪音、パジャマを椅子に起き、代わりにメイド服をとる。

「これ、ワンピースになってるから。」

うん、頭から被るの。ちょっと屈んで……」

雪音、メイド服を広げて私の頭に被せる。

私が頭を出すと

「そうそう。あとは腕を通して……。」

はい、後ろ向いて。紐結ぶから」

私、後ろを向く。スカートが少し広がる。

「そのままね」

背中ジップを締められた後。

エプロンの紐を手際よく結んでいく。

「(結び終わって) はい、できたよー」

雪音、正面に回ってきて

「うん。サイズ、ぴったり。
…うん、かわいいかわいい」

雪音、私の首輪をさすって

「ふふっ、完璧！
さ、ごはんにしよ」

雪音は私の手を引いて、部屋から出る。

○廊下

廊下は長く、果てしない。
天井は美術館のように高く、何かの体内のようである。

「あめ、ほんとに疲れてたんだね、昨日」

「だって部屋に案内したら、すぐ眠っちゃって…」

「この廊下を通ったことも覚えてないでしょ？」

「ふふっ。
部屋はたくさんあるけど、ほとんど使っていないんだ。
物置になっちゃってる」

「もったいないけど、使い道もなくて…。
すこし片付けて、あめと遊べる場所にしたいなあ」

「あめの部屋、小さい頃、私が使ってたの」

「いいお部屋でしょ？」

家具も揃っているし、風通しもいい。
この家で一番綺麗なお部屋だと思う」

「自分の部屋の場所も覚えていこうね。
自分で戻れるように」

「私？ 私の部屋はね……今はないの。
気分によって寝る部屋を変えてる。
昨日はソファアーの上で寝てた」

○ 食堂

扉を開けると、大きなテーブルと椅子だけがある部屋が見える。
テーブルの上には一人分の食事が置いてある。

「ここが食堂。
もう準備できてるから、食べるだけ。
お腹すいちゃった」

雪音、椅子を引いて座る。

「(すこし息を吐いてリラックスしてから)
ん？ どうしたの？」

「ああ、テーブルの上にあるご飯は私のだよ。
あめのご飯はそっち」

「ほら、左下の方。机の足の近く。
お腹減ってると思って、多めにしておいたよ」

私の食事は床の上に置いてある。

「それじゃ、いただきます」

雪音、朝食を食べ始める。
私、黙ってじっとしている。

「(食べて水を飲んだ後)

…あれ、あめ、食べないの？食欲ない？」

「あ、食べるのに許可はいらないよ。
好きなだけ食べていいからね」

「……ん？どうしたの？」

「……もしかして。
床、嫌だった？」

「ごめんごめん。そうだよね。
ペットでもあめは、あめだもんね」

「机の上で、一緒に食べよう」

雪音、立って床に置いてある食事を
自分の隣の席の前に持ってくる。
あめのために椅子を引いてあげて

「ごめんね、あめ。ここに座って」

私、雪音の隣に着席する。雪音も私の後に座る。

「ご飯は人間用だから食べられるよ」

「はい。あめ。
ご飯、食べさせてあげる」

雪音、スプーンで掬い取って、私の口に持ってくる。

「…あーん……」

私、咀嚼して

「どう？」

「ふふっ、もう一口？」

(うれしそうに) はい、あーん」

雪音、スプーンですくって

私、咀嚼して

「……美味しい？」

あーん」

雪音、スプーンですくって

私、咀嚼して

「(食べるあめを見つめながら)

ふふっ。

…あめが喜んでると、私も嬉しい気持ちになる」

「これから毎日、お腹いっぱい食べさせてあげるね」

【EP03：回遊する世界】

○公園・お昼

公園に散歩しに来た二人。

「あめ。今日、お外ぼかばかして気持ちいいね」

「うん。ずっと家でゴロゴロしてても、
運動不足になっちゃうからね。」

この公園、一周するだけでもいい運動になるよ」

「ん？なに？」

モジモジして……」

「そんなに恥ずかしい？」

「もー、あめは私のペットになったんだよ？」

あめになる前のあなたはもういないの」

「私のペットのあめは、今の格好のまま歩くよ？」

「…誰かに見られるのが怖い？」

でも、その誰かって今のあめに関係ある人？」

「……関係ないよね。」

もうあめは、うちの子だもん」

「他のことは気にしないで。」

何かあったら私は飼い主として、あめのことを守るから」

歩く間。

「(伸びをして) んゝゝゝ」

「ふふふっ。
お散歩なんて、いつぶりだろ」

「そもそもワンちゃんがいなくなって、
あんまり外、出歩かなくなったし」

「…あの時は、ショックだったなあ。
ワンちゃんしか、私のそばにいてくれなかったから」

「…ペットしか、私と一緒にいてくれないの、いつも」

雪音、私の腕をぎゅっと掴んで。

「あめは人間だから、長生きするよね。
出来る限り、私のそばにいてね」

歩く間。

「(気づいて) …あ。ねえねえ、見て!」

「今日クレープのキッチンカー来てる…!」

「ここのクレープ、美味しいんだよ。
甘さもちょうど良くて食べやすいの」

「あめにも食べて欲しい…!」

雪音、駆け出してから気づいて

「あ、買ってくるから
そこのベンチで待ってて」

雪音、キッチンカーにクレープを買いに行く。
私は、ベンチに腰掛ける。

木の葉が風にそよぐ。鳥が鳴き、水が流れる音がする。
おだやかな時間に浸る。
しばらく経って、雪音がゆっくり戻ってくる。

「おまたせ。」

二人分買ったなら、ちょっとおまけしてもらっちゃった」

「はい、あめの分。どうぞ」

雪音、私にクレープを渡して、隣に座る。

「(声にならない程度、座る時に) …んしょ。
いただきまーす」

「(クレープを食べて、
含んでる最中にリアクション) ん！ん〜！おいひい…！」

「ほら、あめも。食べてみて？」

私、クレープを口にする。

「……。ふふっ、おいしい？」

よかったー。もっと食べて食べて」

雪音と私、二人で一緒にクレープを食べる時間。

「このクレープ、誰かと一緒に食べるのはじめて。
あめがいなかったら、こんな機会一生なかったかも」

「(私の反応をみて) 大袈裟じゃないよ。私、学校にも行ってないし、友達もない」

「私のそばにいるのは、あめだけ」

雪音、周りの視線を感じて

「…あめ。クレープ、歩きながら食べよっか。いこ」

雪音とあめ、ベンチが立ち上がり、

早歩きでその場を立ち去る。

すこし歩いて。

「ごめんね、急に。」

誰かに見られてる気がしたから」

「あめのせいじゃないよ。」

そもそも私、この辺りでちょっと有名なの」

「豪邸に一人で住んでる中学生は

ふつーおかしい、みたいだよ？」

「どうでもいいのにね。」

あなたたちの人生じゃないんだから」

「何もおかしいことなんてない。」

だって、もしおかしいなら、

今日あめと一緒にいて、

こんなに楽しくて、嬉しいはずがないもん」

「…あめは、どう？」

「ふふっ。」

「…その格好、似合ってるよ。とっても」

「帰ろう。私たちのうちに」

二人はどんどん深い場所に沈んでいく。

【EP04：泡沫のように戯れて】

○お風呂場・夕方

お散歩から帰ってきた二人。

汗をかいた身体を流そうとお風呂場に。

私は、雪音にシャワーを浴びせられる。

(裸になったふたりが、素直でいられる楽園のイメージ)

「はーい。じっとしてて。

えらいえらい」

「歩いて汗かいたから、気持ちいいでしょ？

シャンプーもしちゃうね」

シャワーを一旦止めて。

雪音、シャンプーボトルをプッシュして、手で泡立てる。

「(いたずらっぽく) それじゃ、いっきまーす」

雪音、私の頭を優しく洗っていく。

「(髪に触れた感覚に驚いて) わっ、あっ、ふふふっ。

ごめんなさい、人の髪洗うのはじめてで…」

しばらく洗った後、

シャワーヘッドを手に取って、お湯を出す動作をしながら、

「流しちゃうね」

私の髪をシャワーで洗い流す。

洗い流し終わったら、

トリートメントボトルをプッシュして手に取る。

「次はトリートメントつけていくねー」

雪音、髪にトリートメントつけていく。

「髪の毛の痛みも、こうやってお手入れすれば、さらさらになっていくから。これから毎日してあげる」

トリートメントをつけ終わったら、トリートメントキャップを手にとって

「じゃあ、キャップ被せるね」

私の髪を纏めて、トリートメントキャップを被せる。

「これ、トリートメントキャップって言って、髪にトリートメントを浸透させるものなの。このまま少し放置して流すよ」

雪音、洗顔剤と洗顔用のネットを手にとり、

「はい、くるっと回って、こっち向いて。この間に顔洗っちゃおう」

雪音、立った状態で、洗顔ネットで泡だてて

「顔あげて？ こっちみて。そうそう」

私の顔を、泡で優しく洗っていく。

「泡をやさしく伸ばして……。流すから、そのままね」

雪音、シャワーを一番弱い状態にして、洗い流していく。

「(洗い流したことを確認して) うん。
そしたらまた、後ろ向いて?」

私、うしろを向いて

「身体、洗っていくよ」

雪音、石鹸を手にとってボディ用のネットで泡立てる。

「ふふっ、泡立てると、良い匂いがするでしょ?
この石鹸、しっとりしてて、お肌ツルツルになるよ」

肩周りに泡をつけて

「背中、いきまーす」

肩から腰に向かって手で泡を伸ばしていく。

「泡を足して……。
次はそのまま、腕いっちゃおう」

雪音、私に密着して耳元付近で

「ちょっと近く、いくよ」

雪音、左腕に泡をつけて、泡を伸ばしていく。

「あめ、身体が大きくて洗うの結構たいへんだ。
腕、指先まで届かない。ちょっと曲げて…?
うん、いいこいいこ」

「次はんたーい」

雪音、右腕に泡をつけて、泡を伸ばしていく。

「……あ、また腕、曲げてくださーい」

腕に泡を伸ばし切って

「んー……、前から洗ったほうが早かったかも。
人間洗ったことなかったから、これから慣れるね」

「まえ向いてくださいー」

雪音、石鹸をさらに泡立てながら

「残ってる箇所、一気に洗っていくよ」

「胸から……」。

（触れて嬉しそうに）あー、あめ！……私よりあるかも」

「（その流れで呟く）ふふふっ、おとなのからだって感じがする。
からだはね」

雪音、石鹸をさらに泡立てながら

「みぎあしー……」

雪音、右足に泡をつけて、泡を伸ばしていく。

「ひだりあしー……」

雪音、左足に泡をつけて、泡を伸ばしていく。

「うん、シャワーで流すよー!!」

雪音、シャワーを出してあめの身体についた泡を流していく。

「キャップも取っちゃうね」

シャワーを出したまま、トリートメントキャップも取る。
髪もシャワーで十分に流していく。

雪音、シャワーを止めて

「はい。おしまいです」

「あめ、きれいになったね。よかったね！」

【EP05：夜のふたり静けさ】

○居間・夜

お風呂から上がった雪音と私。

あめは窓辺付近にある

ドレッサーの椅子に座っている。

「あめ。紅茶持ってきたよ」

雪音、紅茶を持ってそばに置き、

ポットからカップに注いで

「どうぞ」

私、紅茶を飲む。

「ふふっ。」

あめ、昨日来たばかりなのに、もう馴染んでる。

私も頂くね」

雪音、紅茶を飲んで

「（紅茶を飲んで不思議な感覚になり）……」

「あれ、なんだろ……。」

いつも飲んでる紅茶なのに、なんだか味が違う」

「ううん、悪い意味じゃなくて、

いつもより、舌に馴染む気がする。

気持ちの問題かもしれないけど」

「きつと、あめのおかげ。」

紅茶と同じ……、私たち一番最適な状態なのかも。ふふっ

「……あめは、喋れないかもしれないけど……。」

声が出なくても、言葉がなくても。

一緒にいてくれるだけで、私には伝わる」

「……あめのやさしさが」

「今もこうして

私の話、聞いてくれてるでしょ？」

「ずっと。それって特別なことだよ。

少なくとも、私にとっては」

「聞き続けてくれるあなたに私は、何か。したいと思う……」

雪音、私の頭を撫でる。

「……あめ。……あめ」

「ふふっ、呼んでみただけ」

「(思いついたように)あ、髪、とかしてあげる」

雪音、ドレッサーの引き出しから櫛を取り出して

私の髪を梳いていく。

夜の静けさの中で、

髪の毛を梳く音と雪音の呼吸が断続的に聞こえる。

言葉は交わさないが、穏やかな時間が流れる。

梳き終わって、さらさらな髪を手で触れて……。

「髪を触ってる最中に軽くあくびをして」

「ごめんなさい、ちょっと眠くなってきちゃった」

「…そろそろ、寝る準備しよっか」

【EP06：音は眠る】

○あめの部屋（夜）

あめの部屋。寝る前。

あめは、ベッドに入っている。

扉の向こうから、雪音の音がする。

「あめ、入るね」

ガチャッと扉が開いて、雪音、あめのそばまでくる。

「今日はここで寝ようと思って。

ちよっと横にずれて？」

雪音、ベッドの中に入ってくる。

「（ベッドに入りながら）あ、あったかい。……ふふっ」

雪音、ベッドにおさまって。

眠りにつく間をあけて。

「……あめ。今日一日どうだった？」

「私はとっても楽しかった。

……あめも同じ気持ちだったら、うれしいな」

「あめは不思議だね。ペットだけど、人で」

「友達がいたら、家族がいたら、

こんな感じなのかなって、ずっと考えてた」

雪音、私を抱きしめて

「……ありがとう。あめ。
うちにきてくれて。」

あのとき、あめを見つけることができ、よかった」

「…雪音って名前ね、

お母さんがつけてくれた。

私が生まれた日に雪が降ってたから」

「雪が降っても音はしないのに、

どうして音って字が入っているのか、わからなかった」

「今日、あめと一緒に過ごして思った」

「あめが、私にとっての「音」になるんじゃないかって。

あめのおかげで、私の世界に、音が鳴った」

外でぽつぽつと雨が降ってくる。

「……もうひとりぼっちじゃないよ。

これからは」

「……大事にするね。ずっと」

「……おやすみ」

雨の音に包まれながら、雪音は「寝息」を立て始める。

【 Epilogue : 雪音 】

○あめの部屋（朝・雨が降り続いている）

私、目が覚めると、隣に雪音が起きて、
優しくみつめている。

私は、しゃべれている。

「……おはよう。よく眠れた？」

「ここが、どこかわかる？」

「そう、あなたのおうち。

私の名前は？」

「…そう、雪音」

「それじゃ、あなたの名前は…？」

私が、答える間。

「……これから先、何があっても。

雨が降ったら思い出して。

自分が何者なのか。そして、私のことを」

「……………あめ」